「本音」と「失言」のあいだ

一昨年亡くなった立川談志さんは、六十年近い落語家人生の中で、六年間だけ国会議員だったことがある。

一九七一年の参院選全国区に当選。五十人中最下位だったが、「寄席でも選挙でも、真打は最後に上がるもんだ」と言って笑いを誘ったそうだ。

四年後、沖縄開発政務次官に就任。沖縄視察の際、二日酔いのまま記者会見に臨み、「公務と酒のどっちが大切なんだ」と問われると、「酒に決まってんだろ」と言い返した。

一筋縄ではいかない破天荒ぶりと毒舌で知られた落語家だ。この程度のやり取りは、芸の世界では、くすりと笑わせて終わる話だが、政治家の立場は違う。これが引き金となり、わずか三十六日間で政務次官を辞任した。

「落語とは人間の業の肯定である」というのが持論だった。政治家としての職業意識はどうあれ「もちろん公務が大切です」なんて答えは、自分の生き様として言いたくなかったのかもしれない。政治家としては失格だが、型にはまらなかった落語家の、むしろ愛すべきエピソードとして語られることが多い。

もっと古い話になるが、戦前戦後の政治家に、自民党結党による保守合同の最大の立役者と評される三木武吉という人がいた。

衆院選の立会演説会で、対抗馬が「男女同権となったのに、ある有力候補は妾を四人も持っている」と三木氏をなじった。

その後、悠然と登壇した三木氏は「『ある有力候補』とは、不肖この三木武吉であります。貴重な一票は、先の無力候補より、有力候補たる私に」と言って聴衆を笑わせ、「妾が四人と言うが、事実は五人であります。いずれも老来廃馬となりましたが、捨て去る不人情は三木武吉にはできませんから、みな今日も養っております」と言い放ち、拍手喝采を受けたという。

この話は妾の数が違う説があったりして細部は不明確なのだが、今なら、もっとスキャンダルになったかもしれない。しかし、明治生まれの豪放磊落な政治家のからりとした明るさを伝えるエピソードとして、印象深く伝わっている。

多少の毒舌や下品な言葉も「まあ、あの人だからしょうがない」と許される雰囲気を持つ人がいる。タレントや芸人に多いが、政治家でもすれすれの発言をしながら、むしろ愛嬌に変える技を見せる人がいる。多くの有権者に選ばれた代表として、人を本当に傷つけたり、差別したりするか否かという辺りに評価の線引きがあるのだろう。

そういう意味で、ずっと違和感を感じていたのが、ともに日本維新の会の共同代表を務める石原慎太郎氏と橋下徹氏だ。普通の政治家なら進退にかかわるような過激な言葉を繰り返しても、世間が慣れてしまったのか、問題になる基準が違う。「あの二人は別格の域に達している」という解説も聞いた。

だが、とうとう橋下氏がつまづいた。

「あれだけ銃弾が飛び交う中、精神的に高ぶっている猛者集団に休息を与えようとすると、慰安婦制度が必要なのは誰だって分かる」

この発言には、女性一人一人の人生や人格を度外視し、男の欲求不満を解消する道具に貶めることに痛みを感じない権力者の目線を感じる。その後、「当時は―という意味だ」とか「他の国が必要としていた」とか「慰安婦を容認したことは一度もない」との強弁を繰り返したが、不快な印象は消えなかった。

橋下氏の発言を「本音」として評価する意見もある。だが、そこには、人間の内側の見たくない暗部を、公の場で露悪的にさらけ出すようないやらしさがある。何より、橋下氏の社会や人間に対する根本的な見方の歪みがにじんでいるようにも感じる。前出の「酒が好き」とか「妾がいる」といった頭をかきながら打ち明けるような「本音」とは違って、暗い。

橋下氏は、発言をマスコミの「誤報」と言って撤回していない。参院選直前の失言は相当ダメージが大きいだろう。

やはり、人の評価に別格扱いはなかった。政治家の印象は、言葉の積み重ねで変わる。有権者はそれを、じっと見ている。

＜由＞